

8月6日ヒロシマ - 被爆の実相

09.10.8

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

はじめに：なぜ被爆の実相を学ぶのか

【被爆の実相を「つかみきる」ことはとても難しい】

瞬時に都市と人間を壊滅させた「瞬間性」

戦闘員と非戦闘員、老若男女、国籍も区別なく殺傷した「無差別性」

すべての生物と、生物の生きてゆく環境に対する徹底的な破壊「根絶性」

被害が人間の身体だけでなく、精神・生活にもわたる「全面性」

被害の影響が長く続き、場合によっては世代をこえて影響する「持続性」

一。1人ひとりの人間の上に、原爆が落ちてきた (1945年8月6日8時15分)

1. どういう人たちの上に落とされたか

広島被害地図 (資料)

* 街の中心部をねらって (「相生橋」が目標地点)

* 広島の当時の推計人口 (34万~35万)

「当日死者」の65%は、子ども・女性・お年寄りという非戦闘員

* 10歳未満の子どもが18%、60歳以上のお年寄りが8%、

女性(10~59歳)が39%

広島爆心地付近、街の様子

* 猿楽町 (資料)

* 中島地区



リトルボーイ



CGで復元した中島地区の街並み (現在の平和記念公園)。手前は広島県産業奨励館 (現在の原爆ドーム) = 平和公園復元映像製作委員会提供

2. 死の放射線（初期放射線）

100万分の1秒 - 原爆炸裂前

* 猛烈な核分裂反応により、原子爆弾をつきぬけて、爆心地一帯に、中性子線の矢がささった。初期放射線（原爆が爆発して1分以内に放出された放射線のこと）は、あらゆる物質を通り抜け、地上に達し、あらゆるものを突き刺した（資料）

「爆心地にいた人々は、100万分の1秒に発せられる最初の中性子から、それを避けることなく浴びました。そこにいた人は、いわゆる爆風とか熱戦とか閃光がなかったとしても、全員が亡くなっていたであろうと推定されるわけです。誰1人避けることはできなかったのです」

（『原爆投下・10秒の衝撃』NHK出版より、広島電機大学葉佐井博士の話）

『朽ちていった命 - 被曝治療83日間の記録』（新潮文庫）から（資料 下）

人間だけでなく、「生命」そのものを根底から破壊する放射線。

* 「いのち」の対極にある兵器、それが核兵器

3. 火球と熱線

「一瞬、目も眩むような閃光、あと思った瞬間、思わず左後方上空を見た私の目に、黄色とも、橙色ともいえない火の玉を見た。左の顔面に熱い！と手をやったとき、暖かい風に吹きあげられ、身体が浮き上がって、右前方に走るようにのけぞり倒れた。その距離は5、6メートルはあるだろう。そこまでは覚えていた」

（高野真さん、当時27歳 - 爆心地から南東へ2キロ、比治山）

広島原爆の「火球」 - 3秒間の巨大なエネルギー放出（資料）

* 100万分の1秒までに、爆弾内部の温度は250万度。原爆が炸裂、火球出現。

* 100万分の1.5秒、温度は40万度。太陽の70倍近い高温。火球の直径は20メートル。

* 0.2秒後、火球は直径310メートルに膨張。最も大きく、明るく見える瞬間。この時間から、2秒までの間に熱線の90%が放出される。大量のガンマ線が放出され、空気と反応して紫色に見える。

* 熱線は地上に突き刺さり、瞬時にあらゆるものを焼いた（溶かした）。爆心地に近い人ほど、この熱線による火傷の被害が甚大だった。爆心直下の場合、その温度は1千数百度～2千度以上になったと予想される。広島の場合、爆心地から3.5キロまで「閃光やけど」の被害が出た。

* 爆心地では、身体の小さな子どもたちは一瞬にして炭になった。

熱線による火傷

* 証言から（被爆者の証言 ～）

* 生き残った被爆者における、火傷（外傷）のもつ意味

4. 衝撃波と爆風

衝撃波（空気の圧力の強弱が伝わる波）

- * 火球の表面の膨張で大気圧が極めて急激に大きくなり、この空気の高圧になった部分が火球から離れて音速を超えるスピードで広がる。
- * 爆心地から1キロの地点の1㎡の面積が衝撃波から瞬間的に受ける圧力は10 t前後に及び、鉄筋コンクリート以外の建物は完全に破壊された。
- * 火球直下の原爆ドームはどうなったか（資料）

爆風の広がり

- * 衝撃波の高い圧力部分とその前面の大気圧との大きな圧力差によって、空気の移動である強烈な爆風が発生する。
- * わずか10秒のあいだに、広島市街は破壊されつくした
- * 爆風は中心部から広がった。爆発の3秒後に1.5キロ、7.2秒後に3キロ、10.1秒後に4キロの地点に到達したと予測される。
- * 河村弘康さんの体験（爆心地より2キロ、資料）
- * 木片やガラス片が人々に凶器として突き刺さった
- * この爆風によって、木造建物の多くは倒壊し、人びとは倒壊した建物に閉じ込められ、さらに熱線で生じた火事によって焼き殺された。「当日死者」の48%が、「建物内（下）での圧焼死」という事実。
（他、爆風によって地面などにたたきつけられた 36%、熱線で焼かれた 10%）
- * 無数に起きたこの現象が、「建物の下敷きになった人を助けられなかった（見捨てた）」という、被爆者の「心の傷」として深く刻まれる結果となる（第4講義で詳しく）。

二。爆心地の人たちの「死」について

1. 爆心地の惨状 - 証言から（被爆者の証言 ~ ）

2. 爆心地の人たちの「死」について

そこに、「1人ひとりの死」はあったのだろうか？

「ジェノサイド（大量殺戮のこと - 長久）のおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。...人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ」（石原吉郎『望郷と海』ちくま学芸文庫）

広島での建物疎開（空襲に備えての空地増設）学童の悲劇

- * 作業中に被爆、殺された学徒は約6000人。
爆心地付近（現在の平和公園一帯）では、9校、約2,000名が全滅。戦争推進のための「総動員」の悲劇でもある。

（被爆者の証言 ~ ）



「新大橋（爆心から約 600m - 長久）のあたりに行くと、全身火傷で水を求めうごめいている中学生、女学生。倒れたまま、『おじさん、水をちょうだい』とあちこちから呼びかける声。だれがだれやら、親兄弟が見ても見分けがつかないだろう。真っ黒に焼けた唇は、ぷうと大きくふくれあがり、顔が腫れ、目がつぶれ、わずかに開いているばかり。あたりにはシャベル、鍬、バケツ、救急袋、弁当箱などが散乱していた。何百という無数の死体だった。橋の上、橋の下にもごろごると人が転がっている。巨大な瀬川倉庫は倒壊していて紅蓮（ぐれん - 猛火の炎のたとえ）の炎があがっていた」（6日夕方。小川春蔵さん〈当時33歳〉の証言）

「人間」と「人間らしい死」を、原爆は否定した

- *「あの日」亡くなった人で、家族に看取られながら死ぬことができた人は、わずか4%。
- *原爆は、「その死を確認するすべもない死」を強いた。遺族は、肉親の最期のときをさまたげに想像して苦しんでいる。
- *広島市の詩人峠三吉は、愛らしい女学生の死を「にんげんから遠いものにされはててしまつて」とうたい（資料）、「にんげんをかえせ」と叫んだ。
- *死体処理についての証言（証言集 ~ ）

3. 広島市の爆心直下、島外科病院の「あの日」

いつも患者でいっぱいだった

- * 1933年に開設。400坪の敷地にレンガ造り二階建て、中庭を抱えてコの字形に約50の病室があった。低料金で評判もよく、いつも患者でいっぱいだった。

- * 8月6日、院長の島薫さんは、世羅郡甲山町の知人の病院に出張手術に来ていて、偶然にも助かる。「広島が全滅」の連絡をうけ、同行の看護婦とともに

夜、広島市内に入る。島さんが病院の姿を目のあたりにするのは、7日午後。「あんなに堅固であると思っていた私の病院が紙のように破壊しつくされた」（遺稿集）

- * 80人余りの職員、患者はほぼ全員が即死。島さんは廃墟のなかからわずかに見えそうな救急資材を手に、被災者の救護活動に夜を徹して取り組む。多くの負傷者が訪れた。

みんな裸身だった。疲れ果て、負傷者の間に身を横たえ、眠る間もなく耳に入ったのは、助けを求める少女の声だった。川を隔てた方角から聞える悲痛な叫びに眠りを中断されながら、島さんが目覚めたのは8日午前5時頃。手当ての甲斐なく、負傷者の多くは亡くなった。島さんは「数週間前には呉が、そして今度は私の町広島が！私の眼には涙が一杯

たまつた。『戦争とはこんなものか』と自問した」と回想している。



爆心直下の島外科の様子

* 廃墟の中から、病院が再建されるのは、被爆から3年後のこと。爆心地とされた中庭には「記念になるものを」と紅いバラをはわせた4本のやぐらが建てられた。平和のバラ」に託した島さんの思いはどういうものだったのか。島さんが残した言葉…「私の新病院は平和と貧しき者、窮乏したる者を世話することにささげられているのである」(遺稿集)。(以上は、『社史が語る 原爆・ヒロシマ』新日本出版社、2003年より)

4。「被爆当日の写真」と「原爆の絵」

中国軍管区司令部に報道班員として詰めていた松重美人さん(中国新聞カメラマン)

「御幸橋西詰(爆心地から約2.2キロメートル)の惨状は言葉にできません。動かない母親の体にすがりつく幼子、生後間もない赤ん坊を両手に抱きかかえ半狂乱で叫ぶ母親…。アスファルトにべったりと横たわる被災者の目が私を見つめているようで、シャッターを切るのに気後れがしました。20分くらいためらい、やっとの思いでシャッターを切ったのです。その勢いで少し近づき、もう一度シャッターを切った。ファインダーは涙でうるんでいました。『顔がわかる写真を』と前に回りこんだが、どうしてもシャッターが切れませんでした。『すぐ救援隊がきますから、がんばってください』。そう言って、逃げるようにその場を離れたのです」(前掲書より)



御幸橋付近、警官派出所前

* 爆心(500m)では、シャッターをきれなかった…

「紙屋町の電停の安全地帯で電車をのぞいた時、あまりのむごさに目をそむけました。広島駅行きの電車の中で、乗客が数十人前側に倒れて折り重なって死んでいるのです。内臓は破裂し目の玉は飛び出ている…。その形相にどうしてもシャッターを切ることができませんでした」(同上)

原爆の絵

「キノコ雲の下で、人々はどのような悲劇に見舞われていたのか。原爆投下直後の広島の人々の様子を記録した写真は、当日、爆心地から2.3キロ離れた地点で撮影された3枚しか残されていない。摂氏3000度以上にも達した激しい熱線に焼かれ、爆風と衝撃波に襲われた人々。爆心地から半径2キロ以内は炎に包まれ焦土のなかを人々は逃げまどった…。そうした惨禍を映像で記録するものは、当日その場にいながら奇跡的に助かった人が自らの記憶を描いた『原爆の絵』だけである(中略)『原爆の絵』は、一瞬にして家族や友人を奪い家や財産を破壊した原爆への怒りと、二度と悲劇を繰り返してほしくないという祈りを、見る者に雄弁に語りかけてくる。絵の1枚1枚が発する叫びにぜひ耳を澄ませてもらいたい」

(『原爆の絵 - ヒロシマの記憶』NHK広島放送局編、NHK出版、2003年)



爆心地から1,300m、天満町
木原敏子さんの絵(原爆投下当時17歳)

三。さらなる地獄が広島の人びとを襲う

1。火事嵐

爆発後20分すぎると、強風にあおられて、広島市内は火の海に（火事嵐）

* 中心部は熱による上昇気流。風速10数メートルにおよぶ強風。

2。「黒い雨」「黒いすす」などの放射性降下物

30分後には黒い雨が（放射性含有物をふくむ）

次回「ナガサキ」のときに詳しく解説します

3。放射線症 次回「ナガサキ」のときに詳しく解説します

4。被爆直後から、人々のたたかいは始まった

被爆者救援 - 広島日赤など

ライフラインの復興 - 中国電力

路面電車の復旧 - 広島電鉄

救援列車は走った - 旧国鉄

さいごに：1945年のうちに約14万人が亡くなった広島...

< 次回「ナガサキ」の話のポイント >

長崎原爆の特徴、放射線症について、浦上地区、長崎医科大学、など

【広島の実相を学ぶために読んだ文献（紹介した以外のもの）】

『原爆災害 ヒロシマ・ナガサキ』

（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編、岩波現代文庫、2005年）

『原爆の子 - 広島の子供たちのうたえ 上・下』（長田新編、岩波文庫、1990年）

『ヒロシマ - 壁に残された伝言』（井上恭介、集英社新書、2003年）

『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』（山口彊、朝日文庫、2009年）

『広島第二県女二年西組』（関千枝子、ちくま文庫、1988年）

『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳』（大野允子、ポプラ社、2005年）

『いしぶみ - 広島二中一年生全滅の記録』（広島テレビ放送編、ポプラ社、1970年）

『爆心地中島 - あの日、あのとき』

（元大正屋呉服店を保存する会・原爆遺跡保存運動懇談会編、2005年）

『いのちの塔 - 広島赤十字・原爆病院への証言』

（「手記集」編纂委員会編、中国新聞社、1992年）

『原爆に夫を奪われて - 広島農夫たちの証言』（神田三亀男編、岩波新書、1982年）

『きこの雲の下から、明日へ』（斉藤とも子、ゆいぽおと、2005年）

『原爆写真 ノーモア ヒロシマ・ナガサキ』

（黒古一夫・清水博義編、日本図書センター、2005年）

『あの日... 「ヒロシマ・ナガサキ 死と生の証言」より』

（日本原水爆被害者団体協議会編、新日本出版社、1995年）